

地域ネットワークだより

海と日本プロジェクト in 鹿児島

2023
スタート

太平洋と東シナ海に囲まれた鹿児島県は海岸線の総延長距離が2,666kmと全国3位。離島人口は全国1位で、私たちは日ごろから海を身近に感じて暮らしています。しかし、最近では海と触れ合う機会や恵みを味わう場所が減り、海洋ごみが目立つ海岸も少なくありません。

日本財団は次の世代により良い海を残そうと、全国各地で「海と日本プロジェクト」を推進しており、MBCも県内13の企業や団体と実行委員会を組織して、2016年からこの運動に取り組んできました。去年からは鹿児島での推進母体として「一般社団法人 海と日本PROJECT in 鹿児島」を設立し、活動の幅を広げてきています。そして今年度も「海と日本プロジェクト in 鹿児島」がスタートしました。



「#日本財団」「#海と日本」「#umigomi」で投稿してね！
Facebook/Twitter/Instagram

海と日本プロジェクト in 鹿児島は、日本財団が推進する「海と日本プロジェクト」の取り組みの一環として行なっています。



▲集合写真



▲参加した児童のみなさん

「海と日本プロジェクト」は5月27日から6月11日までを「春の海ごみゼロウィーク」と位置づけ、全国一斉に清掃活動を行いました。このうち鹿児島では6月3日（土）にいちき串木野市の照島海岸で清掃活動が行われ、地元の人たちを中心に子どもから大人まで約100人が参加しました。照島海岸では、毎朝ボランティアによる清掃活動が行われているほか、「海と日本プロジェクト in 鹿児島」の活動の一環で、去年、漂着したごみを入れる専用の「拾い箱」も設置されていて、気軽にゴミを拾う仕組みが整えられています。それでも、1時間ほどでペットボトルやプラスチックなどの漂着物が数袋集まったほか、マイクロプラスチックなどの細かいごみも多く、参加した照島小学校の児童らは「みんなでゴミ拾いをすると楽しいね」「きれいな海がいいね」などと会話しながら、熱心にごみを拾っていました。

今年度の「海と日本プロジェクト in 鹿児島」では、以下のイベントが予定されています。



▲照島海岸に昨年設置された拾い箱

- 6/17 スポGOMIワールドカップ鹿児島予選（垂水）
- 夏 スポGOMI甲子園鹿児島大会
- 8月末 ウニの食害と海商品開発を学ぶイベント（阿久根）
- 秋 秋の海ごみゼロウィーク（全国）
- 秋 ナイトアクアリウムイベント（かごしま水族館）

鹿児島防災シンポジウム

8・6水害から30年

49人の死者・行方不明者を出した1993年の8・6水害から今年は30年目にあたります。水害の記憶を若い世代に引き継ぎ、改めて防災について考えようと6月3日(土)、鹿児島市のセンテラス天文館で「鹿児島防災シンポジウム」を開催しました。



「鹿児島防災シンポジウム」は、台風や集中豪雨、火山噴火などさまざまな自然災害に見舞われてきた鹿児島の防災力を高めようと、MBCとNHK鹿児島放送局が毎年共催しています。今年は8・6水害から30年の節目ということもあって、鹿児島県と鹿児島市にも共催に加わっていただきました。

30年経過するとMBCの社内でも当時を知る人間は数少なくなっていますが、水害の記憶をいかに若い世代に引き継ぎ、防災に役立ててもらうかは大きな課題です。シンポジウムではまず、県内の中高生5人がNHKが開発した「メタバース防災研究所」の仮想空間にアバターで入り、8・6水害で大きな被害が出た鹿児島市内のポイントを巡りながら、水害を視覚的に体験する様子が紹介されました。

パネリストとして参加した香川大学の磯打千雅子特命准教授(地域防災)は「過去の水害を知らずに被災するのと、知っているのとでは、被災した時の行動が変わってくるので、記憶の継承が大切」と指摘。鹿児島出身のモデルで動画クリエイターのねおさんは「若い人はあまり地図を見ないので、ハザードマップの見方を伝えるだけでも身近に感じてもらえるのでは」と話すなど、災害の日常化、激甚化が進む中で命を守るための行動のあり方について考えました。

また、1階のセンテラススクエアでは、NHKが8・6の時の天文館や竜ヶ水の様子を体験する「メタバース防災研究所」や、最新のAR(拡張現実)技術を使って水かさが増していく様子を合成画面で体験できるコーナーを出展したほか、県防災士会は心肺蘇生のAEDの使い方やいざという時に役立つロープの結び方のワークショップを行うなど、防災関連のイベントでにぎわっていました。

この「鹿児島防災シンポジウム」の様子は、MBCで6月20日(火)に放送したほか、NHK鹿児島放送局も8月4日(金)の午後7時40分から放送する予定です。



▲4人のパネリストが参加



▲センテラススクエア展示

「わが町」の情報発信!



1953年10月10日に放送を開始したMBCラジオは、今年開局70周年を迎えます。AMでスタートしたラジオは、2015年の元旦に紫原の中継局からワイドFMの92.8MHzでAMと同じプログラムの放送を開始し、その後、阿久根(93.7MHz)、枕崎(94.8MHz)、鹿屋(94.2MHz)、蒲生(86.7MHz)、種子島(82.3MHz)と中継網を広げてきました。また、パソコンやスマートフォンで聴くことができるラジコなど様々なデバイスにも配信しており、県内外のリスナーに親しまれています。

MBCラジオには、それぞれの地域にこだわって、最新的话题を発信している「わが町」のラジオ番組が数多くあります。その一部をご紹介します。



毎週木曜 午後5時15分～
パーソナリティ 宮内ありさ



この春スタートした新番組、「おおすみていんぐ」は大隅で話題の人物や新しいスポットなど、旬の情報を鹿屋在住の宮内ありさリポーターがお伝えしています。



▲(左) 宮内ありさリポーター



▲大崎町の熱血ラグーマン 坂口晃大さん

6月8日(木)にご紹介したのは、20年前に京都から大崎町に移り住み、ピーマン農家を営むかたわら、ラグビー協会を立ち上げ、子どもたちにラグビーを熱血指導している坂口晃大さん。大崎町の応援もあって、今月、町の運動公園に念願のラグビー場が完成した喜びをお伝えしました。



きい
りい
しな
ま

毎週金曜
午後5時15分～
パーソナリティ
赤塚里美(左)と
池ノ上里穂

霧島出身のMBCタレント2人がナビゲートする霧島愛あふれる「いいなきりしま」。豊富な温泉やロマンあふれる歴史、伝統芸能など、霧島の「いいな」をたくさんお届けしています。

I LOVE あいらじお

毎週火曜
午後5時15分～
パーソナリティ
財津三奈
スマイリー園田

始良・加治木・蒲生の3つのエリアからなる始良市の魅力をお伝えする「I LOVE あいらじお」。スタッフは全員が始良市の出身者が在住者の「Made in 始良」で、地元の名産・モノ・コトを紹介しています。



いちき串木野
ホット情報

毎週土曜
午前10時40分～
パーソナリティ
佐々木武海

ひとが輝き、文化の薫る、世界に拓かれたまち「いちき串木野」の市政情報をお伝えする番組です。人気のまろラーメンから老舗の珈琲店、東シナ海を望む温泉、偉人たちの足跡をたどる薩摩藩英国留学生記念館など、ホットな情報をお届けしています。



毎週日曜
午後3時54分～
パーソナリティ
平山琴実

じゃっど! すっど! きばっど! 南さつま

番組名は鹿児島弁で「そうだ! やろう! がんばろう!」という意味。「南さつまを「熱く」する人」をテーマに、南さつまで活躍する人や盛り上げる方々に出演頂きながら、県内に広く南さつま市の魅力をお伝えしています。

わが町の情報をラジオで発信したい! などご要望ありましたらお気軽に地域ネットワーク部までお問い合わせください。



テレビ番組「かごしま4（月～金/午後3時49分～）」で放送した各地のメディア発の話題です。

100年フードに「なり味噌」認定



徳之島 スタジオカガワ (5月29日放送)

5月から徳之島のスタジオ カガワが徳之島で頑張っている人や話題の人を「徳之島\ワイド/な人々」として紹介して下さることにになりました。初回のこの日は地元の食材を生かした加工品づくりに取り組む「子宝島の朋友」のみなさん。朋友が作る「なり味噌」は、昨年度、文化庁が世代を超えて地域で受け継がれてきた食文化を認定する「100年フード」に選ばれました。奄美地方は年貢の取り立てに苦しむ中で、ソテツの毒を抜いて粥などの食材にしましたが、「なり味噌」もソテツを使った伝統の調味料です。今ではあまり使われなくなりましたが、代表の直島悦子さんらが島の食文化をつないでいこうと、地元産のソテツや塩に国産大豆などを加えて生産をはじめ、2年前から販売にこぎつけたそうです。直島さんは、「知れば知るほど島の食材の底力を感じるようになった。徳之島の食は素晴らしいということを島の子どもたちや島外の人たちにも広めていきたい」と意気込んでいました。



北海道の高校生 龍郷でロケット打ち上げ



エフエムたつごう (6月1日放送)

5月19日、龍郷町瀬留のりゅうがく館にいたのは北海道札幌市の札幌旭丘高校の3人。モデルロケットの打ち上げ実験のためにやってきたサイエンス部のメンバーです。札幌旭丘高校は、去年9月に静岡県富士宮市で開かれた「ロケット甲子園2022」で優勝しており、3人は6月22日にパリで開かれる世界大会に出場することになっています。同部のロケットは、龍郷町に立地する野村特殊工業の部品や火薬を使っていることから、野村真仁社長と世界大会前の最終調整をするために来島しました。

バドミントンのシャトルケースを再利用した本体に固定翼やエンジンなどを取り付けた後、龍郷町浦の町中央グラウンドで発射実験を行いました。大会では、打ち上げの高さが約260メートルに達すること、滞空時間が42秒から45秒の間であること、落下地点がグラウンドの敷地内であることが求められます。その上で、本体に宇宙飛行士に見立てた生卵を搭載し、割ることなく回収することが条件です。実験では2日間で6機を打ち上げ、いずれも成功。3人の高校生は確かな手ごたえを感じた様子でした。



種子島に魅せられて



種子島タネナンドTV(6月8日放送)

西之表市西之表で陶房六大を構える木下裕一さんは、熊本県玉名市出身の62歳。18歳でサーフィンに出会い、オーストラリアを始め、各地の波乗りポイントを巡ったあと、27年前に種子島に移住してきました。サーフィンが目的の移住でしたが、県外の陶房で修業した経験があったことから、種子島焼の陶房を開くことにしました。種子島の土は砂鉄を多く含んでいることから、種子島焼にはずっしりした重量感があり、鉄分が作り出す茶褐色が特徴で

す。昔ながらの蹴(け)ろくろで作陶する木下さんの器には、回転数が安定しないからこそ生まれるリズムと、あえて釉薬を使わない素朴な味わいがあります。穴窯を使う焼きも、火の通りを計算しながら器を配置した後は、薪だけでじっくり焼き締めるのだそうです。毎日の食卓という空間を彩りながら、「10年後も使いたい」ものを作り続けたいという木下さん。陶房にはゆったりとした時間が流れていました。

